



許広平と魯迅



上海虹口北四川路の、かつて内山書店があったあたり。

許広平(1898-1968)……北京女子師範大学で学んでいたときに魯迅と知り合い、その後良き伴侶として、魯迅が亡くなるまで彼の活動を支え続けた女性。

## 魯迅から許広平を想う

少し前、魯迅先生の生誕百周年を祝う一連の行事に参加した。——墓にお参りし、演劇の公演を観賞した。44年前には魯迅先生の出棺を群衆の中で見送った。24年前には墓を移す改葬の儀式に参列した。それらのすべてが厳かな、しかし熱烈な雰囲気の中で執り行われた。

だが今回の生誕百周年の記念行事ではある変化に気づいた。魯迅先生の親族であり戦友である広平先生（許広平）の姿が見えなかったのだ。彼女もすでにこの世の人ではなくなっていた。私の心は沈んだ。そして魯迅先生のことを思い出しながら、知らず知らずのうちに広平先生のことを追想しはじめた。

私が魯迅先生に会ったのはただ一度、それもわずかな時間だった。しかしそれは私に忘れられない深い印象を残した。

1934年の春、私は20歳を過ぎたばかりだった。上海美術専門学校で勉強しながら天一映画会社で仕事をしていたときだった。

かねがね魯迅先生は辛抱強く人を教えて下さる方だといううわさを耳にしていたので、非礼を顧みず彼に自分の小説、散文、旧体詩など数篇の幼稚な作品を送ってご指導を賜りたいという手紙を書いた。偉大な文豪が無名の一兵卒など相手にはしてくれないかもしれないと考えていたので、数日も経たないうちに彼から返事が来るなどとは思ってもいなかった。一筆箋に、スコット・ロード（現在の山陰路）の内山書店①に会いに来てくれるようにと書かれていた。

①内山書店(上海)……内山完造によってつくられた書店。店内には客と団らんでできるような内山サロンと呼ばれていたスペースが設けられ、日本人客だけでなく中国の知識人たちも多く常連として通った。魯迅も常連客の一人で、彼が国民党に追われていたときには内山完造がかくまったこともあった。

これは本当に望外の喜びだった。だが魯迅先生にとってみれば普通のことだったようで、いつも見知らぬ若者が彼に教えを求めにやってくるので、忙しい中、時間をつくって自ら彼らに会うようにしていたということだった。彼は青年の気持ちを理解し、私を含めた“子牛たち”を可愛がっていた。私は興奮して、魯迅先生に会えるといううれしいニュースをすぐに“天一”の同僚の劇作家、左明に伝えに行った。

ちょうど左明は『阿Q正伝』を改編して公演しようとしていたときで、魯迅先生の意見を聞きたいと考えていたところだった。それで私たちはある日の午後、一緒に訪問することにした。

内山書店の奥にある部屋で、私は長いあいだ尊敬し慕っていた魯迅先生に会った。いつも彼の作品を読み、彼の写真を見ていたので、彼とは昔からの知り合いであるような気がした。彼はやせていたが顔色がよく元気はつらつのように見えた。

そうは言っても、私はやはり少し緊張していて不安だった。それに、彼の穏やかで優しい口調の中にも厳しい響きがあった。彼はまず私の詩を取り上げ、不思議そうな眼つきをして尋ねた。

「君はどうして旧体詩を書くのですか？」

私は恥ずかしそうに答えた。「小さいときから古い詩を読むのが好きで、勉強もしたことがあります。」このとき心の中で、ひょっとしたら彼は、若者は旧体詩を詠まないと思っているのではないだろうか、と考えた。彼は続けて言った。「旧体詩が書けるなら新体詩も書けるでしょう。」

散文を書くにも詩情は必要です。新体詩を書くのは散文を書くのにも助けになるでしょう。散文は心を表現し事がら叙述するのはもちろんですが、言葉の修飾は優美で簡潔であることが必要です。さらに重要なのは、詩と散文がすべて『志』を表現してはなくてはなりません。内容が空であってははいけません。」

彼の丁寧な指導で、私はやっと彼の言った意味がわかった。

以前、彼がこのような話を書いていたのを、彼の著作の中で見たことはあるが、今自分の耳で聞き、とても暖かく親しみがあり、深い誠意がこもっているのを感じた。最後に私の仕事について、彼は映画や演劇に関しては興味があまりないようだった。(数年後に広平先生と話したときも、確かに魯迅先生はそうだった、と彼女が言った。)彼は、私が役者だと思っていたようで、こう聞いた。

「君は役者ですか？」私は首を振ってそうではないと言った。左明が急いで私に代わって、私は役者ではなく映画会社の『明星』の宣伝原稿を書いていると説明してくれた。彼は自分が誤解していたのを知り、ちょっと笑って言った。そして絵を一生懸命学ぶように励ましてくれた。彼が美術に対して興味を持っているのは明らかだった。かつて“美専”の同級生の劉韡鄂などは木版画制作をしていて、かつて彼から熱心な指導を受けたことがあったので、彼が美術に対して興味を持っているのは知っていた。私たちの会話はおおむねこのようなものだった。

左明がちょうど『阿Q正伝』について話そうとしたとき広平先生が来て、家に來客があったことを伝えにきた。それで彼は広平先生や私たちとちょっとおしゃべりをして帰っていった。これが永遠の別れになるとは思ってもみなかった。

広平先生は明るくて情熱的な人だった。私たちは昔からの知り合いのようにすぐに意気投合し、女性と文学、芸術の問題について話し合った。当時私は『女子月刊』の選稿人をしていたので、すぐに彼女に『女子月刊』に文章を書いてもらえないかと頼んだ。彼女は広東訛りを操って笑わせて言った。「私は文章を読むだけで書くことはできません。」それは彼女の謙遜で、彼女は20年代に北京の女子師範学校にいたときに書いていたのだ。現在は魯迅先生が著述に精を出せるように、彼がペンを用いて闘い、ペンを用いて人民のために精神的な財産を創造できるように、彼女は魯迅先生の世話をするのに没頭していた。

広平先生の邪魔をしたくなかったので私はおいとまを告げた。今回得たものはとても大きかったと感じた。魯迅先生と交わした言葉の数はわずかだったが収穫は多かった。私が魯迅先生から受けた影響は大きく、それからは口語による詩や散文を書き、言葉を磨き「言葉に志をこめること」に努めた。

これは、心を砕いて詩文を作るということでもあり、有益な思想を伝えるために心を砕いて詩文を書くということでもあった。魯迅先生のこの教えは創作を始めたばかりの若者にとってはとても有意義なもので、永遠に否定されることのない真理でもあった。私は魯迅先生の教え感激し、この文学大師に尊敬の念を抱いた。残念なことに、もっと多くのものを教えてもらいたかったのに、彼は慌ただしく逝ってしまった！

1936年、秋風がもの悲しく吹きわたる9月。南京で『婦女文化』月刊の編集をしていたとき、魯迅先生が病死されたというニュースを耳にして、悲痛の極みを感じた。彼が埋葬されるその日、上海に駆けつけた。(ついでに印刷屋に回す『婦女文化』第3号を持っていった。)

午前中に列車を下りて万国葬儀場へ駆けつけて魯迅先生のお眠りになっている御顔を仰ぎ見ようと思った。

しかし膠州路の交差点はすでに人で塞がっていて正門までたどり着くのがやっとで、中に入ることはできなかった。沈んだ気持ちのまま大衆の行列の中に立ち、黙ってお弔いをした。このとき私は、非常に多くの大衆が哀悼の心を表しているのを知り、魯迅先生は亡くなったけれど、彼の精神は依然として人民の心の中に生きているのだと思った。人民は彼を尊敬し、彼に哀悼の意を捧げた。なぜなら彼は人民の作家で、正義のために屈しない人を畏敬させる人だからだ！

それ以降、魯迅先生の命日が来るたびに、私は文を書いて記念した。1939年には彼が新体詩を書くように言ったことを記念して、以下のような『哀思魯迅先生』を詠み、私が編集長をしていた『綿花文芸』の3巻の1号で発表した。(当時は魯迅先生を記念して文章を書くのは許されなかったもので、私は偽名を使って発表した。)

時代の前哨地で 消えかかっている灯台のように、  
道に迷った子羊たちは暗闇の中で叫ぶ！  
誰が彼らを導くことができるのか？  
誰が彼らの模範となることができるのか？

それはあなただけ、あなただけ、魯迅先生！  
富や名声になびくことなく  
権勢に膝まずくことなく  
任官の委任状も汚い臭錢も好まず

これゆえに皆 あなたを讃え 敬愛し  
あなたの偉大な人格に感じ入り  
あなたの道徳と知識に感銘し、  
何千人もがあなたを支持する

あなたが去ろうとも あなたの精神はこの世に生きる  
歴史上に あなたの著作は永遠に残る  
若者は あなたが望んだ戦い継承するだろう  
解放のために努力せよ 自由の実現を！

魯迅先生の願いはかなった！ 彼が生前訴えていた「民族解放闘争」は、ついに「統一戦線」の形をとり、八年間にわたる抗日戦の後、勝利を獲得しました！

1946年に私は再び上海に来た。魯迅先生の没後十周年の記念日の次の日、私は専誠霞路霞飛坊（現在の淮道路坊）から広平先生に会いにいったのを覚えている。昔のことが話題に出ると、彼女は内山書店でその日会ったときの状況を覚えていた。久しぶりの再会に二人とも興奮し、この10年間に経験した事々を心行くまで語り合った。

彼女は“孤島②”の時期に偽りの政権（中華民国時代を指す）から受けたさまざまな迫害の様子を話してくれた。それでも強く何ものにも屈しない闘争を行った。彼女の勇氣に心から感動した。彼女のあの“五四”を戦った姿には尊敬の念を覚えずにはいられなかった。

②孤島……魯迅が亡くなったあと、日本軍によって逮捕・拘束され、2年間投獄されていたことを指す。

私も自分の流転の人生を話した。彼女は私が戦争中に貧困と病に苦しんでいたことと、二度も蔵書を失う災難に遭ったことを聞いてくれた。一回目は七七事変のあと、北京と上海に持っていた蔵書を故郷に送ったのだが、信陽が敵に占領され、祖父の蔵書といっしょにすべて焼かれてしまった。日本軍が投降した後に、私は四川で買った書画を上海に送ったのだが、三峡を通るときに船が座礁して沈没し、数箱の書画が水の中に消えてしまった！

運送会社はひと山のどろりとなった紙をすくい取って私にくれた。このときの私の損害を広平先生は残念に思い、彼女が関わって新しく出版される『魯迅全集』を、これからできる私の蔵書の最初の本になるようにと、送ってくれることになった。私は

受けとることはできないと言い、最終的に四割引で買うように話をつけてくれた。それから彼女は『魯迅全集補遺』を買い、署名して私にくれた。

(不幸なことに、“文革”時に三度目の受難に遭い、この『全集』も保存することができなかった。幸いにも『補遺』はまだある。)

その日広平先生は一体の精巧な魯迅先生の陶製の半身像をくれた。私はガラスのケースに入れ本棚に置いた。これは魯迅先生を記念するだけでなく、広平先生も記念するものだった。

しかし、この文章を書いているとき、不注意から半身像を壊してしまった。まるで自分の心が壊れてしまったようだった。これは広平先生がくれた記念の品だ。いま、人も無く物も無くなった。そう思うと思わず涙がこぼれてきた。

解放前(中国共産党が政権を取り中華人民共和国ができたことを中国では「解放」と呼んでいる。)、私と広平先生はときどき行ったり来たりしていたが、建国後彼女が北京に転居すると、文通するしかなくなった。(これらの手紙もすべて散逸してしまった。)

1956年の魯迅先生没後二十周年のとき、国は魯迅先生を万国共同墓地から虹口公園に改葬することを決めた。これは魯迅先生を特別に尊重して為されてことだ。改葬の儀に参列するため、その数日前に広平先生が上海にやって来た。

ある日の夜、私が机に向かって文章を書いていると、突然、何度も私の名を呼ぶ声が聞こえてきた。急いで扉を開けると、何と広平先生がとつぜん姿を現わしたのだ。私たちは興奮してしっかりと手を握り合った。このとき彼女は、部屋を照らしているのがただひとつの電気スタンドだけであるのに気づいて、首を振りながら大きな声で言った。

「まあ、どうして大きな電灯をつけないの？ 暗すぎるわよ！」私はすぐに部屋の電灯をつけた。彼女は机に向かっていき、優しく私をたたいて言った。「目を大事にしないと。この電気スタンドはだめよ。もっと明るいのにしないと、いい作品は書けないわよ。」私はうなずいて彼女の忠告を受け入れた。(それからすぐに電気スタンドを買い替えた。今でもこのスタンドに目をやると彼女の親切な心を思い出す。)

この日の晩、彼女は興奮しているようで、また少し疲れているようにも見えた。彼女は革靴を脱ぎ、楽な姿勢でソファーに横になり、私をそばに座らせた。そして私たちはおしゃべりを始めた。彼女はこの数年のできごとを話した。「ほんとうにあなたが羨ましい、ずっと書きつづけていられるなんて。私なんか外国訪問をするだけじゃなくて、国内の視察にもあちこち行って、たくさん会議に出て社会活動もしなければならぬの。

一日じゅう忙しくてごたごたしていて、何も書けないわ。」

これは事実だった。建国後彼女は全国人民代表大会委員になり、また全国婦女連合会の副主席になった。確かに仕事の負担は大きかった。だが私はよく知っていた。彼女は仕事の合間を見て、こつこつと魯迅研究と魯迅の著作の注釈を書き、さらに魯迅について回想録を書いていた。決して彼女が言うような、「何も書けない」ではなかった。

彼女はとても勤勉な人だった。彼女は国家に関心を持ち、文学も心から愛していた。これは魯迅先生の生き方と違いがなかった。その上彼女は魯迅先生と同様に、若者たち、特に女性作家の成長に関心を持っていた。彼女はいつも、中国には女性作家が少なすぎる、と言っていた。彼女は私が書くことをやめず、永遠にペンを持ち続けているように、努力して書きつづけるように、女性を題材にしたものを多く書くようにと励ました。今日、女性たちは立ち上がり、あらゆる面である程度の貢献をした。それで我々はこの“部隊”を重視しなければならないのだ、と言った。

彼女の言いたいことは理解できた。彼女は女性運動家で、女性に対して深い同情心を持っている。私たちが現在の社会について言及するとき、封建主義の思想の弊害はまだ人々の頭の中に残っていて、彼女は少しも迷うことなく、教育の必要性を強く宣伝しなければならない、と主張した。私は彼女に言った。私の作品は、古典ものも現代ものもずっと女性を題材としてきた。私は古典の伝統劇『牡丹亭』を改編した小説『杜麗娘』を彼女に贈呈した。彼女はとても喜び、誠意をもって言った。

「古代の女性の反封建主義と自由を求める闘争を書くのは意義があることよ。でも、近代的な女性の精神状態を反映したものを書くのはもっと意味があると思うの」

彼女の話聞いていて、魯迅先生のあの辛抱強く人を教え導く性格がそっくりそのまま彼女に受け継がれていることが、私にはわかった。彼女は魯迅先生の良き学生であり良き伴侶であり、良き戦友という名に恥じない人だった。

最後に魯迅先生の改葬が話題になったが、広平先生の顔に少し悲しみの表情が見えた。当然のことだ。そのときの彼女の心が矛盾を抱えていたことを覚えている。彼女は言った。「国家と人民が魯迅先生の崇高なる栄誉を称えるのには感謝している、でも、人が亡くなり埋葬され安眠したのに、20年後に再び掘り起こされて改葬されるのは辛く感じる。」

私は彼女を慰めた。「これは魯迅先生の功績をもっと記念するために、そして国際文化の交流をさらに促進するための、文学界における大きなできごとなんですよ。」

魯迅先生が改葬された場所は生前の住居で、よく行き来していた内山書店の近くの虹口公園です。とても適切な場所だと思いませんか？」

彼女はうなずいてユーモアたっぷりに笑って私に聞いた。「私の考え方は少し古いと思う？ それとも心が弱いのかしら？」

私は即座に答えた。「とんでもない。あなたは私より強い人です。私だったら泣いてしまいます！」

彼女は朗らかな笑い声をあげ、その笑い声は夜の静寂を突き破った。

もう 12 時になろうとしていた。広平先生はもう失礼すると言って立ち上がり、私は路地の出口まで送っていった。あの時私は山陰路四達里に住んでいて、彼女の住居はかなり離れた“大陸新村”にあった。彼女は立ち止まり北の方を眺め、それから車に乗って行ってしまった。私も思わず北のほうを向いて、そこから離れがたい気持ちで眺めていた。

魯迅先生の改葬があったその日、私は虹口公園の外で魯迅先生の棺を載せた車を迎え、車に従って墓所に向かった。墓所は公園の奥で南向きにしつらえられていた。花や木々に囲まれ静かで美しいところだった。この日は日光がさんさんと注ぎ、秋風が枝を吹きわたり、かすかな楽の調べが金モクセイの香りを運んでくるような、詩情が満ちあふれていた。

茅盾先生が儀式を執り行い、宋慶齡、巴金、周揚などが参加し、周りには多くの人々が幾重にも重なっていたのを覚えている。式典は二十年前の魯迅先生の葬儀のときと同様に、厳粛なものだった。ただそこにいる人々の気持ちは同じではなかった。悲しみにくれるのではなく、魯迅先生の栄誉のために興奮していた。魯迅先生の棺は新しくなり、深紅の色に塗られており、五星紅旗で覆われ、目を引くほど大きなものになっていた。

宋慶齡が広平先生の手を取り、棺を納める墓穴を、そしてそれが石の蓋で覆われるのを見ていた。私は墓の左にある花壇に立ち、広平先生が黙って頭を垂れているのを目にし、いろいろな感慨を覚えた。どうして感慨を覚えないことがあるのか？ 魯迅先生が一生をかけて奮闘したその理想がついに実現し、その新中国が選んだ新しい墓所を安息の地としたのだ。彼が長年尊敬し付き従った偉大な毛沢東が、彼のために自ら墓碑を書いた。国民は彼のために雄大で壮観な銅像をつくったのだ。

これはすべて、国民の彼に対する愛情を示すものであり、文芸関係者や若者たちが永遠に学ぶべき思想、精神の象徴である。私は広平先生の表情がだんだん和らぎ、笑顔を浮かんでいるのを見た。彼女は魯迅先生の栄光を嬉しく思い、笑ったのだ。



三年の歳月が過ぎ、1959年の晩春四月、私は北京に行った。ある日の午後、広平先生に会うために、彼女の家のある西城の四合院に行った。しかし彼女が家にいなかったため会えなかった。私は、再度訪問したいという内容の手紙を書いて出した。

二日後に、思いがけず彼女が私の宿泊所に会いにきたのだが、あいにく私は外出していた。それで彼女はメモを残して帰った。メモにはこう書いてあった。

「私の深い感情を知っていただきたく自ら参上いたしました、双方ともに各々の仕事に引きずられてお会いすることが難しいのは、出会いの縁がないからでしょうか！」

広平先生は少し太ってこめかみの白髪も多くなっていたが、まだかくしゃくとしていて、相変わらず優雅で堂々としておられた。

彼女は言った。健康状態は前のようではなく、軽度の高血圧症が長くつづき、ときどき頭痛がして頭がぼうっとすることがある。私は、この病気と彼女の性格が矛盾しているのを知っている。彼女は積極的な仕事をする人で、自分が休むことをよしとしない。そのため血圧を正常に戻すのは容易ではない。私は、適度に休憩も入れて働き、晩年を大事にしてくださいと忠告した（このとき彼女はすでに還暦近くになっていた）。彼女はゆっくりと手を振り、「私は一生忙しく過ごしてきたけれど、忙しいだけで何の成果もあげてはいないし、国家にも少しも貢献してはいない」と言った。

私は彼女の話には賛成しなかった。彼女が魯迅先生の上に注いだ心血は少なくはない。魯迅先生の生前、彼女は先生の看病をし、生活上の面倒を見て、原稿を写し、手紙の代筆をするのに昼も夜も苦労していた。魯迅先生が亡くなった後の最も困難な時代も、強くしっかりと魯迅先生の事業を守り続けた。

長いあいだ忠節を尽くし魯迅先生の大量の著作を守り続けた。この貴重な精神的財産を完全無欠に保存して一層の光彩を放つようにした。彼女が果たした苦勞は国内においても世界の文学界においても重大な貢献で、彼女の功績は確かなものだ。

しかし彼女は私の話に同意しなかった。彼女は謙虚に首を振って言った。「私のやったことなど取るに足りないわ。功績はすべて魯迅先生のものよ。」

私は彼女の言った二番目のことばは認める。だががんこに言い張った。「あなたのやった功績を抹殺することは許されません！」

たぶん私の言い方があまりにも硬すぎたのだろう、彼女は豪快に大声を上げて笑った。それから水掛け論になり、私は「これは事実に基づき、真実を求めた結論だ」と宣言した。その後、話題が私のことになった。

彼女は私の近況を聞いた。当時私は女医の林巧稚医師を題材にした脚本の改作をしていて、彼女を取材するために北京まで行き、資料を集めていた。広平先生はその話

を聞くと嬉しそうに、自分と彼女はとても親しいのだと言い、医師に関するいろいろなできごとを話してくれたので、集めた資料はさらに豊かになった(この脚本は完成していない。当時は知識人を題材にして書くのは容易ではなかったからだ。)

広平先生は女性の創作作品を反映させるのを賛助するだけではなく、ずっと女流作家の生活に関心を持って応援してきた。彼女は1956年に人民代表大会代表メンバーとして上海にきて、知識人に対する政策の実施状況を視察した。あるときの座談会の席上、彼女は上海映画製作所の楊小仲監督が、私がやっていた仕事は私には合っていない、と言ったのを聞いた。彼女はすぐにどういうことかと質問した。

このことで、私が1956年にもとの創作部門に戻れたのは、何と彼女が関係していたのだとわかった。私は感動して思わず彼女の手をしっかりと握って言った。「ぜったいにあなたの期待と友情に背くことはありません。私は死ぬまで文章を書きつづけます！」彼女はうれしそうに私を抱擁した。

私たちは思う存分おしゃべりを楽しんだ。別れるとき、彼女は表門まで見送りに来てくれた。なぜだかわからないが、心の中にぽっかり穴が空いたように感じた。これが私たちの最後の面会になるとは、このときまったく予測できなかった。

広平先生がこの世を去ってもうすぐ10年になる。彼女の顔と声は常に私の脳裏にあり、彼女が私に示してくれた好意を思い出すと辛い感情に襲われる。しかし魯迅先生を思う時、彼の輝かしい業績は彼女の存在とは切り離せないものだと思い至り、慰められる。私は魯迅先生の名声は後世に残るものと深く信じているが、広平先生の名も永遠に不滅だと思っている。

1981 年末 上海にて

□□□□□